檜隈寺周辺の調査
―第184次

調査の概要　本調査は国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備にともなう発掘調査である。調査は国土交通省より委託を受け、2008年度より実施しており、今年度は最終年度の７ヵ年目にあたる。調査区は2013年度に実施した飛鳥藤原第180次調査（本書128頁）Ａ区の南側およびＢ区の東側にあたる、丘陵斜面部に設定した。

第180次調査では古代から中世までに属すると推定される建物、塀が発見されており、今回の調査ではそれらの建物、塀の広がりを確認し、古代から中世にかけての檜隈寺伽藍南方における利用実態を知るてがかりを得ることを目的とした。

調査は2015年２月２日から開始し、３月27日に終了した。調査面積は当初364㎡と予定していたが、遺構の広がりを確認する必要が生じたため、西に拡張し、377㎡とした。調査の詳細は次年度の紀要において報告することとし、ここでは成果の概要を述べる。

調査の成果　今回検出した主な遺構は、掘立柱建物５棟、掘立柱塀１条、土坑４基である。また、ほかに小穴、土坑を多数確認した。

調査区西端部では、掘立柱建物の柱穴６基を検出した。これは第180次調査Ｂ区で検出したSB972と一連の建物と考えられる。時期は中世と推定する。調査区中央部では、掘立柱建物２棟と掘立柱塀を検出した（図180）。これらの建物方位は檜隈寺伽藍の造営方位の振れに概ね一致する。時期は古代と推定する。掘立柱塀は第180次調査Ａ区で検出したSA964の延長と考えられ、西に折れ曲がることを確認した。西に続く柱列の遺構は検出されず、後世の削平を受けている可能性が高い。調査区東端部では、掘立柱建物２棟を検出した。それぞれ、Ａ区で検出したSB963および小穴と一連の建物と考えれる。時期は中世と推定する。

本調査の結果、檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世の二時期に建物等が建てられたという第180次調査での見解を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開していくことがあきらかとなった。　**（前川　歩）**

図180　第184次調査中央部で検出した建物と塀（北から）